

＜県研究主題＞

一人ひとりの教育的ニーズを踏まえた教育課程の編成と教育活動の展開の工夫・改善

提案 1

提案者 平泉 実穂・藤原 亜木（横須賀地区）

＜研究主題＞

コミュニケーションの力を育む授業作りの工夫 — 交流会を通して —

1 提案内容

横須賀では市内46校の特別支援学級が8部会に分かれて研究を進めている。その第3部会である5校で話し合いを重ねる中から共通した課題の一つとして「コミュニケーションの力の向上」が挙げられ、取り組みが続けられてきた。

(1) テーマにせまるための手立て

① 実態把握から実践へ

数年前から5校の特別支援学級が集まって行ってきた交流会の様子と各校の「お勧め教材」について情報交換をする中で、コミュニケーションの力を育むために有効と思われる取り組みが多く報告された。交流会を通してコミュニケーションの力を育てることができるのではないかと考えられるようになった。

② 研究テーマの絞り込みからさらに実態把握を行い課題を明確化

さらに実践や話し合いを重ねて、コミュニケーションを「相手を意識して合わせようとする力」「自分の気持ちや要求を伝える力」の2つの力と捉えることにした。この観点からさらに実態を分析し、個々の児童の課題を明確にした。

(2) 授業実践を通して

① 事前の取り組み

交流会を通して楽しくかかわる体験を重ねることでコミュニケーションの力を育みたいと考え、次の点に留意して進めた。

ア 交流会の参加人数を調整する。

個々の交流体験を充実させる為には参加人数が多過ぎない方が良いと考え、5校を2つのグループに分けて行うことにした。

イ 交流会の基本的な内容は同じ形式に。

繰り返し体験し慣れることが重要と考え、どの学校とでも交流できるように会の形式を整えた。ゲームについては、その都度工夫することにした。

② 単元作りの実際

年間4回の交流会を計画し、2回目までを行った。

ア プログラム作成のポイント

支援のポイントとして「ゲーム選び」「ルール作り」「場作り」「グループ作り」「教材・教具作り」「教師の言葉かけ」「見通しを持たせる工夫」の7項目を挙げ、それぞれの留意点を共通理解してプログラムを作成した。

イ 評価と次回プログラムの検討

活動時の児童の言動や感想から、個々の児童についてめあてとしている2つの力がどのように育まれているかを評価するとともに、7項目の支援のポイントに沿って活動

内容を反省し、次回のプログラムを作成した。

### (3) 成果と課題

#### ①児童の変容

1回目、2回目で参加の様子に成長が見られる児童が多かった。2回ともほぼ同じプログラムにしたことが成功経験として自信につながり、有効であった。

#### ②今後の交流会への課題

コミュニケーションの基礎を作るために意識的に言語活動を取り入れていきたい。また、コミュニケーションの力を育むためのゲーム選びの難しさを改めて実感し、さらに教材開発や情報交換をしていきたいと考えている。

## 2 協議内容

「人とかかわりを通してはぐくむコミュニケーションスキルについて」を協議の柱とし、5つのグループに分かれて話し合った後、全体で共有した。

### (1) 遊びを通して学ぶことの大切さ

個々の目標があり、無理せず、繰り返しの中でやがて全員が楽しさを味わえるようにとの場の設定となっていた。

### (2) コミュニケーションの力を育むための支援のポイントが有効

今回支援のポイントが7項目設定されたことがよかった。それぞれのゲームがどのポイントとかかわるかの分析が表になり、わかりやすく次回につながる反省として生かされる。

### (3) 「交流会」を日々の指導に生かす

交流会に至るまでの日々のていねいな積み重ねがうかがわれた。また行事だけで終わらせないで日常生活の細かなスキルにつなげていくことが重要と考える。

### (4) 簡単なことでいいから複数回行う

参加者のほとんどが「交流会」を実践しているが、年間1～2回であった。同じ流れで繰り返すことの効果を実感した。その際、子どもの育ちを見取りながら支援のしかたを変容させることで、さらに効果が高まると考えられる。

### (5) 「コミュニケーションの力を育む」には

子どもだけの自然な状態ではコミュニケーションスキルの向上は難しい。教師の計画的な働きかけが重要。教師自身のコミュニケーション力についても常に振り返りが必要。

## 3 まとめ

今回は「コミュニケーションの力を育むために」を追求しての交流会であり、育てたい力を明確にしたことで評価を共通理解することが可能となっていた。このことを日頃の指導に生かしてほしい。指導要領の国語と自立活動のねらいを合わせた内容で構成されていた。自立活動のめあては一つの活動の一つではなく、個々の実態によって選んだものを組み合わせて設定すると良いであろう。指導要領に定められている自立活動の6区分26項目は、日ごろの学校生活、学習活動のあてはまる場面で指導に努めてほしい。

コミュニケーションの力を育むことは通常級でも課題となっていることが多いので、特別支援学級が研究・実践したことを発信し、センター的役割として機能してほしいと考える。

## &lt;研究主題&gt;

身体意識を高める授業づくり ～体づくり運動を通して～

## 1 提案内容

一昨年度（平成24年度）までの体育科における取り組みを継続し、入学してきたばかりの児童の実態を踏まえながら、基本的な動きや運動技能・身体意識を高めるための支援の仕方について、体づくり運動を通して研究・実践を行ってきた。講師として、作業療法士の方を招き、身体意識を高めるための支援の仕方や手立ての工夫について、助言をもらいながら日々の授業づくりに生かしていった。

## (1) 具体的方策と実践による児童の変容

児童の実態に応じて年間指導計画を作成し、体育科における体づくり運動を通して、身体意識を高められるような段階的な授業づくりに取り組んできた。

## ① 1学期の取り組み

まず児童の実態把握を行い、着替え、移動、並ぶ場所の確認を行うなど丁寧な働きかけを続けたことで、次は何をするのか、どこへ行くのか見通しがもてるようになった。また、初めての活動に対しては、6年生のリーダーや他学年の動きを手本にして、動きを模倣するように働きかけたことにより、意欲的に練習に取り組む姿が見られた。

## ② 2学期の取り組み

運動会の練習では、体育着の着替えの際に、着替えの写真や手順カードを用いたり、並ぶ位置をフラフープで示したりするなど視覚的な支援をすることで、スムーズに活動できた。ラジオ体操についても、児童の実態に応じて個別に支援を行うことで、できる動きが増えた。

11月に作業療法士の方を講師として招き、児童の身体意識を高められるような支援の仕方や手立ての工夫について、助言をいただいた。

## ③ 3学期の取り組み

2月の公開授業後の研究会においては、作業療法士の方に、各運動についてのさらに具体的な手立てや支援のあり方について助言をいただいた。日々の継続的な取り組みにより、児童は自分の身体のことを少しずつ分かっていくようになった。（身体意識の高まりが見られた。）また、細やかで適切なアドバイスをいただいたことで、教師の支援の量が減り、児童が自分で動けることが増えてきた。

## (2) 成果と課題

## ① 成果

- 繰り返し同じ運動を継続することで、流れや「いろいろな動き」が分かってきた。
- 手立ての工夫を行い、丁寧な働きかけをすることで、体育の様々な約束事や各活動における動きを理解できるようになった。
- 学級内に児童を温かく迎え入れる雰囲気があり、友だちの声掛けや積極的な働きかけがあったことが、児童の成長につながった。
- 作業療法士の方に、それぞれの活動において目指す目標を達成するための支援のあり方について、適切な助言をいただいたことで、児童の身体意識を高めるための手立てや支援の方法について工夫や改善を行うことができ、効果的だった。

## ② 課題

- 目指す個別目標に向かって、一つひとつの運動をしっかりとできるようにしていきたい。
- 個の実態に合わせた指導法はどうあるべきか、考えていく必要がある。
- 各運動を通して、柔軟性や筋力、バランス感覚などを養い、さらに身体意識を高めていくための効果的な指導法について、専門性の向上を図りたい。
- 外部講師の活用や円滑なチームティーチングのあり方について、検討が必要である。

## 2 協議内容

協議の柱：「分かった、できた」が実感できるような支援の手立ての工夫・改善について  
身体意識を高めるための支援の手立ての工夫について、活発な協議が行われた。

- (1) 年間を通して、繰り返し同じ運動（体づくり運動）を続けたことは、子どもに安心感を与え身体意識の高まりにつながった。
- (2) 外部講師の活用を図り、作業療法士の方の専門的な助言を日々の指導に取り入れたことは、効果的だった。
- (3) 絵カードを見せて、動作を示すなど、視覚化はとても有効であり、次の活動に見通しをもって取り組める。
- (4) 異学年で活動する場合、運動量や個人差を考慮した工夫が必要。
- (5) 音楽が好きなら、曲を取り入れるなど、子どもの特性に応じた手立てを用いると良い。
- (6) 子ども自身がやってみたいと思えるような体育の教材や場の工夫をしていくことが大事。
- (7) 教室内に、運動に親しむ環境づくりを行うなど、支援級で行う体育の充実も図りたい。
- (8) ルールの理解やコミュニケーションなど、体育の授業の中でも自立活動の部分を補える。

## 3 まとめ

- (1) ・教育課程については、特別支援学校学習指導要領を参考にしてほしい。
  - ・小中高と社会自立に向けた長いスパンの中で、その子の将来像を考え、その子に今どんな支援をし、何を身につけさせたらよいのか、今できることは何かなど、教師側も見通しをもつことが大事。
  - ・手立てについては、視覚的な支援や、教材・教具の工夫など、いろいろな方法があるが、認知の仕方はそれぞれ違うので、個に応じて工夫をしてほしい。
  - ・特別支援教育において、外部の専門家から助言を得ることは、指導の充実、指導方法の改善や専門性の向上のためにも大切なことである。今後、外部の専門家との連携は、ますます重要になってくる。専門家から得た知識を学校で生かしてほしい。
- (2) ・2つの提案は、子どもたちが「わかった、できた」が実感できるような、授業づくりに取り組んでいる実践であった。
  - ・「合理的配慮」やその基礎となる環境整備について
  - ・小学生は、能力開発期にあり、「読む力」「書く力」「計算する力」を身につけることは非常に重要であり、保護者の教育的ニーズである場合も多い。子どもたちの将来の自立と社会参加を考え、教科学習で身につけた力を、生活のどの場面で発揮させるのか、そういうことを見通しながら、授業に反映させていくことは、大切にしておきたい視点である。